

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

中村 能盛

論 文 題 目

日本のフランス文学受容に言語教材と修道士が果たした役割
—1890年代から1920年代を中心に—

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 佐久間 淳一

委員 名古屋大学教授 木俣 元一

委員 名古屋大学准教授 日比 嘉高

委員 椋山女学園大学教授 田所 光男

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文で論者は、明治・大正期の日本におけるフランス語教育およびフランス文学の受容の実態を論じている。この時期のフランス語教育を考える上で、暁星学園における教育とそこで用いられた教科書に関する考察は欠かすことができない。暁星学園のフランス語教育には、元々フランスで活動していたカトリック修道会マリア会の神父、修道士が深く関わっているが、東京帝国大学仏文学研究室の初代主任教官を務めたエミール・エックもまた、マリア会の神父であり、暁星学園で教鞭をとった経験を持っていた。したがって、マリア会の思想や宣教方針を通して、暁星学園におけるフランス語教育及びそこで用いられたフランス語教科書について分析することは、東京帝国大学におけるフランス文学講義がどのようなものだったのか、また、講義を通じてフランス文学が当時の学生たちにどのように受容されていったのかについて、その手掛かりを得ることにもつながっている。

第1章では、19世紀フランスにおけるマリア会の活動について論じている。マリア会は、当時のフランスでフランス語の初等教育を行っていたが、1882年に政教分離を定めたフェリー法が施行されると、マリア会が刊行していた教科書も世俗化を迫られるようになり、そのことを一つの契機として、宣教活動や教育活動の場をフランス国外に移すことになった。

第2章では、1888年に来日したマリア会の神父、宣教師によって結成されたマリア会日本支部が暁星学園を創立した経緯を述べるとともに、暁星学園における教育について、論者自らが卒業生から行った聴き取りや回想録における証言等を元に明らかにした。また、1895年に暁星学園が刊行を開始し、暁星学園の授業でも使用されたフランス語文法教科書について、その内容と変遷を分析している。

第3章では、暁星学園が刊行したもう一つの教科書であるフランス語講読教科書(*Choix de lectures françaises: cours élémentaire* 及び *Choix de lectures françaises: cours moyen*)について、その内容の変遷や、採録されたテキストに見られる特徴等について詳細な分析を行い、これら講読教科書の紙面に、マリア会の思想及び教育理念が反映されていることを論じた。

第4章では、東京帝国大学仏文学研究室の初代主任教官であったエミール・エックが行った講義内容を、受講生の回想等を元に考察した結果、その講義内容が、ジョゼフ・ヴェルニエにより暁星学園から刊行された、文学作品の抜粋を掲載する上級者向け講読教科書(*Cours complet de langue française: cours supérieur*)の内容と多くの点で共通していること、また、講義では主としてカトリック系作家が紹介され、伝統的なナショナリズムと新古典主義が称揚されていたことを明らかにし、マリア会の神父でもあるエミール・エックが、東京帝国大学の講義においても、キリスト教の教理及びマリア会の思想や教育理念を広めようという意図を持っていたと論じた。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

東京帝国大学仏文学研究室からは、周知のように著名な仏文学者や作家が輩出しているが、フランス文学受容の初期段階における同研究室での教育の実態についてはよく知られていない。また、同研究室初代主任教官であるエミール・エックを通して、暁星学園やマリア会とつながりがあることについても、これまで十分な検討がなされてこなかった。

このような、従来あまり注目されてこなかった事実に着目し、先行研究もほとんどない中で、初期段階のフランス語教育やフランス文学受容の実態の解明に果敢に挑戦し、一定の成果を挙げたことは高く評価できる。

また、本論文の審査委員の専門分野が様々であることは、論者の研究が従来の学問領域には収まりきらないことを示しており、既存の学問の境界を乗り越えようとする進取の姿勢も大いに評価できる。本論文の主査の専門は言語学であり、論者自身も言語学専門に所属してはいるものの、本論文が通常の意味での言語学の論文に当たらないことは、何ら本論文の学術的価値を左右するものではない。

本論文において評価すべき具体的な成果としては、論者が暁星学園の卒業生にインタビューを行ったことも挙げられる。論者は、その証言を論拠の一つとして活用しているが、当時のフランス語教育を知る卒業生が既に高齢であることを考えれば、その証言自体が大変貴重と言える。また、論者は、このインタビュー以外にも多くの貴重な関連資料を発掘しており、その資料的な価値もまた、本論文の評価を高めているとすることができる。

その一方で、本論文に課題がないわけではない。マリア会、暁星学園、東京帝国大学仏文学研究室というつながりを重視するあまり、当時のフランス語教育やフランス文学受容の全体像は逆に見えにくくなってしまっている。

暁星学園で刊行された教科書や、仏文学研究室におけるエミール・エックの講義を通して、マリア会がキリスト教思想を広めようとしていたという結論は、十分あり得ることではあるものの、論の展開が強引になっている部分もあり、論証が必ずしも十分とは言えない。また、このことのために論が一面的となって、思想史的により突き詰めた議論など、議論の幅や深みに欠ける点があるのは、議論のきっかけとなり得る興味深い事実を多数発掘できているだけに惜しまれる。

教科書等、フランス語の引用における解釈の誤りも散見される。

しかしながら、このような欠点は、本論文の高い学術的価値を損なうものではなくない。また、今後の研究への取組によって容易に克服可能なものと考えられる。よって、審査委員一同、一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判定した。